

## そ の 他

## 医学の学術論文・学術書における漢字

## その一. 漢字の正しい字体について

藤 田 浄 秀<sup>1)</sup>, 座 間 正 和<sup>2)</sup>逗子病院 <sup>1)</sup> 内科 <sup>2)</sup> 放射線科**Key words:** 医学用語, 交ぜ書き, 書き換え, 新字体 当用漢字, 常用漢字, 印刷標準字体

## I 諸 言

医学の学術論文や学術書の執筆を通して我々は日本語による出版文化の一翼を担っている。従って日本語表記に関して無関心であってはならない。

戦後漢字の簡易化が進められてその学習と表記とが容易になった一面はあるが、同時に、確たる原理・原則に基づいて漢字の簡易化が進められたのではなく、特に漢字の字体に関しては誠に微妙な差異が生じて複雑になり、我々が漢字の字体に精通する事は殆ど不可能にすらなっている。従って間違いも多い。

本稿では、常日項目にする医学に関係する間違い易い漢字字体を検討したい。

## II 戦後の漢字施策小史

表1に我が国の戦後漢字施策を簡単にまとめた<sup>1~4)</sup>。

## I) 当用漢字

昭和二十一年に当用漢字表一八五〇字が内閣告示訓令として公布された。当用漢字表は、「法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示したもの」と規定されており、表外漢字の使用は厳しく制限された。「使用上の注意事項」には、当用漢字で書き表せない言葉の言換えまたは仮名書き、振り仮名の原則不使用、当用漢字表を基準とした専門用語の整理等が示されている。当用漢字の制定により新聞や法令を中心に用字・用語の改善や文書の平易化がなされた。しかし一方で、その強制的・制限的な面に批判もあった<sup>3)</sup>。

昭和二十四年に内閣告示された「当用漢字字体表」は、当用漢字表制定の趣旨を徹底させる為には、更に漢字の

字体を整理してその標準の字体を定める必要があるとして定められた。当用漢字字体表において標準として採用された漢字の字体を「新字体」、または「新字」と言い、それに対して従来正字とみなされてきた康熙字典体の字体を規範とする活字体を「旧字体」、または「旧字」と言う<sup>4)</sup>。

同音の漢字による書きかえ(昭和三十一年七月五日 国語審議会)の幾つかを以下に示すと、

廓→郭 崎→奇 稀→希 研磨→研摩 昂(亢)奮→興奮  
奮 坐→座 刺戟→刺激 滲透→浸透 障碍→障害  
綜合→総合 褪色→退色 洗滌→洗浄 智慧→知恵  
註→注 沈澱→沈殿 曝露→暴露 彎曲→湾曲

等がある<sup>2)</sup>。

## II) 常用漢字

昭和五十六年に内閣告示訓令によって常用漢字が公布された。「常用漢字」とは「常用漢字表」に含まれる漢字一九四五字である。常用漢字表の制定に伴って、当用漢字は正式に廃止された<sup>1~5)</sup>。

現行の常用漢字は平成二十二年に内閣告示第二号として告示された改訂常用漢字二一三六字である<sup>5, 6)</sup>。昭和五十六年公布の常用漢字は廃止されたので、現在は単に常用漢字といえば改訂常用漢字を指す<sup>3~6)</sup>。

常用漢字表は、その前書きにおいて「法令・公用文書・新聞・雑誌・放送等一般の社会生活において、現代の国語を書き表す場合の漢字使用の目安を示すもの」であり、「過去の著作や文書における漢字使用を否定するものではない」と記され、そして重要な事は、この運用にあたっては「科学・技術・芸術・その他の各種専門分野や個人の表記にまで及ぼそうとするものではない」とされた事である。

表1 戦後の漢字施策小史

昭和21年
当用漢字表（1850字） 内閣告示訓令
昭和23年
当用漢字音訓表・同別表 内閣告示訓令
昭和24年
当用漢字字体表 内閣告示訓令
昭和26年
人名用漢字別表（92字）
昭和51年
人名用漢字追加 28字
昭和53年
JIS 情報交換用漢字符号系 （第一水準2965字 第二水準3384字）
昭和56年
常用漢字表（1945字）内閣告示訓令 （当用漢字廃止）
昭和58年
JIS 改正・第二次規格（4字追加・29字勇み足）
平成2年
人名用漢字追加118字
JIS 改正・第三次規格（2字追加）
平成12年
JIS 拡張 （第三水準1249字 第四水準2436字）
表外漢字字体表 （印刷標準字体1022字 簡易慣用字体22字）
平成16年
JIS 漢字コード表の改正 —168字の例示字形を変更—
人名用漢字488字追加・許容字205字の格上げ
平成22年
改訂常用漢字表（2136字）内閣告示訓令 （昭和56年の常用漢字表廃止）

### Ⅲ) 表外漢字—印刷標準字体

平成十二年に国語審議会から「表外漢字字体表」が答申された。「表外漢字」とは「常用漢字表」にない漢字を意味し、「法令、公用文書、新聞、雑誌等 一般の社会生活において、表外漢字を使用する場合の字体選択のよりどころ」となることを目指して作成されたものである<sup>1~4)</sup>。

表外漢字字体表における印刷標準字体一〇二二字は、明治時代から伝統的に活字印刷に使われていたいわゆる「康熙字典体」を基準にしている。同時に「しんにゅう・しめすへん・しょくへん」の三部首の漢字について既に「𠂔」「ネ」「食」とする略字体が浸透している事から、二十二字を簡易慣用字体として認めた。

### Ⅳ) JIS 漢字

電子機器で漢字を表示する為に字種とコード番号を定めたのが「JIS 漢字」である<sup>1, 3)</sup>。

一九七六年に第一水準として二九六五字、第二水準として三三八四字が制定された。一般に使う文字の他、行政情報や地名・地区町村名・人名の漢字を含む。

その後、種々の分野での電子化に伴い、字種の不足が明らかになり実情に合わせて見直しが行われ補助漢字五八〇一字、第三水準一二五九字、第四水準二四三六字も開発された。更に国際的な文字符号企画である「ISO/IEC10646」も JIS 漢字として登録している。現在は第一〜第四水準の漢字は一〇〇五〇字を数える<sup>3)</sup>。

JIS 漢字は電子機器における情報交換用の規格に過ぎなかったが、その影響はコンピューターの普及と共に各方面に及び、常用漢字に含まれない文字の使用が容易になった<sup>1, 3)</sup>。

JIS 漢字は通産省（経済産業省）によって決められた。常用漢字並びに印刷標準字体は、伝統的「康熙字典体」に準じているが、JIS 漢字の字体は「康熙字典体」を排除している。しかし、文部省（国語審議会）による常用漢字や印刷標準字体、法務省による人名漢字に関してはそれを尊重する形で積極的に字体の変更を行った。平成十二年の表外漢字表—印刷標準字体の告示を受けて平成十六年に経済産業省は JIS コード表を改正した<sup>7)</sup>（図1）。改正前の字形と改正後の字形とを比べてみれば、その字形が相当異なっている事が容易に知られる。

表1に「29字勇み足」とある。昭和五十八年改正の第二次規格で、文部省の決めた常用漢字十四字の変更と四字追加と共に、法務省が決めた人名用漢字に従って、梢（←梢）・杼（←杼）・鷗（←鷗）・洩（←洩）等二十九字に新体字を準用する略字体を採用してしまった。これが先走った勇み足であった。一旦決めた規格は簡単に変更できず正字と略字体を同一コードに閉じ込める包摂という考え方で切り抜けて来たが、不運にも教科書に多く出る「鷗」が入っていた為に、「鷗外」を「冒洩」するものだと非難を浴びた<sup>1)</sup>。これが「勇み足」である。

### V) 人名用漢字

人名用漢字に関して表1には主な変更しか示していない。昭和二十三年の戸籍法施行時には人名用漢字は当用漢字のみに限定されていたが昭和二十六年国語審議会が九十二字を別表として公布した。その後、数次に渡って改訂された。その過程で、常用漢字で旧字体も使えるもの一九五字、人名用漢字で旧字体も使えるもの十字を採用した。これを許容字と呼ぶ。平成十六年に四八八字を追加し、同時に人名として使える旧字体の許容字は廃止され全て人名用漢字に格上げとなった<sup>2, 4)</sup>。診断書を書く際に非常に難しい人名用漢字に出会う事があるのは旧字体の漢字が人名用漢字として許容された事に因る。

平成二十二年の常用漢字表の告示による増減を経て、現在は八六二字となっている<sup>2~4)</sup>。人名に使用できる文字はこの他 常用漢字・平仮名・片仮名である。

人名用漢字は法務省の管轄である。「戸籍法施行規則」第六十条第二号に「別表第二」（平成二十七年七月改正）として人名用漢字一覧が掲げられている。

面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形	面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形	面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形	面区点 位置	改正後 字形	改正前 字形
1-16-9	逢	逢	1-19-2	晦	晦	1-22-91	櫛	櫛	1-26-71	榭	榭
1-16-18	芦	芦	1-19-10	蟹	蟹	1-22-93	屑	屑	1-27-7	薩	薩
1-16-27	飴	飴	1-19-75	葛	葛	1-23-9	条	条	1-27-10	鯖	鯖
1-16-78	溢	溢	1-19-83	鞆	鞆	1-23-23	祁	祁	1-27-12	鯖	鯖
1-16-83	鰯	鰯	1-20-45	翰	翰	1-23-81	倦	倦	1-27-33	餐	餐
1-17-34	餌	餌	1-21-68	灸	灸	1-25-11	巷	巷	1-29-82	薯	薯
1-18-8	襖	襖	1-21-72	笈	笈	1-25-28	梗	梗	1-29-83	諸	諸
1-18-64	迦	迦	1-22-10	卿	卿	1-25-49	膏	膏	1-30-5	哨	哨
1-18-71	牙	牙	1-22-34	饗	饗	1-25-84	鵠	鵠	1-30-68	鞘	鞘
1-18-86	廻	廻	1-22-47	僅	僅	1-25-89	甌	甌	1-30-83	杖	杖
1-18-90	恢	恢	1-22-84	喰	喰	1-26-21	叉	叉	1-31-10	蝕	蝕
1-31-54	訊	訊	1-37-7	擢	擢	1-41-46	瀕	瀕	1-50-91	咬	咬
1-31-64	逗	逗	1-37-14	溺	溺	1-41-64	斧	斧	1-51-62	嘲	嘲
1-32-89	煎	煎	1-37-43	屠	屠	1-42-46	蔑	蔑	1-57-8	扁	扁
1-32-90	煽	煽	1-37-50	賭	賭	1-42-51	篇	篇	1-59-89	棘	棘
1-32-92	穿	穿	1-38-52	滯	滯	1-42-58	婉	婉	1-60-84	橙	橙
1-32-93	箭	箭	1-38-59	遁	遁	1-42-60	鞭	鞭	1-64-36	狡	狡
1-33-7	詮	詮	1-38-70	謎	謎	1-42-89	庖	庖	1-65-17	甕	甕
1-33-25	噌	噌	1-38-71	灘	灘	1-43-9	蓬	蓬	1-65-20	甦	甦
1-33-44	遡	遡	1-38-74	檣	檣	1-43-80	鱒	鱒	1-65-54	疼	疼
1-34-60	腿	腿	1-39-71	這	這	1-44-63	餅	餅	1-68-7	筵	筵
1-35-9	辿	辿	1-39-93	駁	駁	1-44-76	爺	爺	1-71-7	腱	腱
1-35-80	註	註	1-40-52	挽	挽	1-45-18	猷	猷	1-73-42	虔	虔
1-36-29	捗	捗	1-40-85	樋	樋	1-46-91	煉	煉	1-74-4	蠅	蠅
1-36-52	辻	辻	1-41-21	謬	謬	1-47-64	屢	屢	1-80-55	韌	韌
1-36-82	挺	挺	1-41-31	豹	豹	1-49-45	冤	冤	1-81-57	騙	騙

図1 経済産業省 JISコード表改正－168字の例示字形の変更－の一部 平成16年2月20日（文献7）

### Ⅲ 正しい字体の漢字の検討

正しい字体の漢字，すなわち正字は，内閣告示された表外漢字表・常用漢字表の字体の漢字並びに人名用漢字で，主な漢和辞典・国語辞典に登載されている漢字の字体とした。

表外漢字表の告示が平成十二年，改訂JIS漢字一六八字の字体変更<sup>7)</sup>（図1）は平成十六年，改訂常用漢字の告示は平成二十二年なので，漢字の字体の確認はこの年以降に出版された漢字源<sup>4)</sup>・新字源<sup>8)</sup>と広辞苑 第七版<sup>3)</sup>に依った。

漢字の発達の歴史の中で，音・意味・用法を同じくす

るが，字体の異なるものが，複数生じてきた。これは「異体字（狭義）」と言われる（島 嶋 鳥 嶋，崎 崎 寄 寄，... 等）。狭義の異体字は俗字ではない。更に略字を含めて正字以外は広義の異体字と言われる。漢字源<sup>4)</sup>は正字以外を異体字と呼び，新字源<sup>8)</sup>は俗字と呼んでいる。本稿では混乱を避ける為に広義の異体字と俗字とを含めて「俗字」と呼ぶ事にする。

梢 末梢の梢である。末梢は今や末梢で何の問題も無いのであるが，末梢から末梢になった経緯を示す事によってある漢字が決められる我が国の国語施策の一端を紹介したい。

解剖学用語 改訂第11版<sup>9)</sup>（昭和四十四年発行）・第12



版<sup>10)</sup>(昭和六十二年発行)では末梢と末梢との両者が用いられている。森 等の解剖学<sup>11)</sup>(昭和三十三年発行)や藤田の解剖学<sup>12)</sup>(昭和四十三年発行)・医学用語辞典<sup>13)</sup>(昭和五十年 第一版)では末梢が用いられている。実は当時、梢が正字であった。旧い漢和辞典も末梢を例示している。しかし、法務省は昭和五十一年に人名用漢字に梢を採用した。それを受けて昭和五十八年のJIS改訂・第二次規格で、通産省は梢から梢に変更してしまった(勇み足)。それを機にして梢が正字となり、梢は旧字になってしまった。これに関して文部省が異議申立てを行った形跡は無い<sup>1)</sup>。この様な経緯で正字が決まる事もあったのである。その後発行された解剖学用語 改訂第13版<sup>14)</sup>(平成十九年発行)は全て末梢を用いている。今や末梢は末梢が正字である。ところが、学術用語集 歯学編<sup>15)</sup>は末梢を掲載している。更に、新字源<sup>8)</sup>(平成二十九年発行)は、梢は俗字・人名用漢字とし、梢を正字として末梢を例示している。一見無機能的に思える漢字辞典でも著者等の信念・執念が強烈に反映されている。

**鞘** 腱鞘ばかりでなく神経外鞘・神経内鞘・鞘間隙・眼球鞘・…等と解剖学名に頻出する。刀の鞘も鞘が正字である。解剖学用語 改訂第13版<sup>14)</sup>では鞘が使用されているが、鞘は鞘の俗字である。

**屑** 落屑・鱗屑は屑が正字である。削りくずは削屑が正しい表記である。

**絆** 人名漢字で、これが「きずな」の正字である。従って絆創膏と表記される。

**倦** 旧字の卷から正字の卷が作られたが、倦の<sup>つくり</sup>旁は卷のまま据え置かれた。従って倦が倦怠感の正しい字体である。倦は俗字である。「ページを捲る」の<sup>めく</sup>旁も同様である。捲土重来(來)の捲は「捲る」と同字である。

以上の様に、平・半・伴・肖・消・削・梢・…等の如く「逆ハの字二画」を有する漢字と鞘・屑・絆・倦・…等の如く「ハの字の二画」を有する漢字との二種類が存在する。我々はこれ等の微細な差異に精通できるのであるか。

**扁** 戸・所・戾・房・扉・扇・偏・編・遍・雇・顧・翻・…等から推測すれば、当然扁が正字と思われるが、実は扁が正字で、扁は俗字である。推測能力の御蔭で少ない労力で多くの知識が得られる筈である。しかし、漢字の字体に関してはこれは当て嵌らない。従って、扁桃炎・扁平上皮癌・扁平苔癬・扁平母斑・扁平足・…等と記載しなければならない。本当、決して嘘をついて、正字でもないのに扁が正字だと煽り立てて騙してはいない。煽・騙も俗字である。どうして扁が俗字で扁が正字なのか。理由は誠に明瞭である。扁を扁の正字にしなかった、しないでしまった。それだけである。理屈はない。

上に挙げた翻は「旗がへんぽん(翻翻)と翻る」の漢字である。翻翻の二字が並ぶと羽と羽との対比が目立つ。

羽は羽の旧字である。ある漢字の羽はそのままに据え置き、ある漢字の羽は羽に変更した国語施策がこれである。

**虚・嘘** 旧字の虞は常用漢字の虚となり、虚血・虚脱・虚弱・虚偽・虚言症・虚構・…等と表記される。上で嘘の字が出て来たが、嘘の<sup>つくり</sup>旁は虚に<sup>つくり</sup>変えずに虞のままに据え置かれたので嘘が正字で嘘は俗字である。すなわち、嘘は嘘の嘘字である。嘘の使用頻度が少ないので、<sup>つくり</sup>旁を虚に<sup>つくり</sup>変えずに嘘のままに据え置いたのであろうか。しかし、世の中に嘘は多く、特に国会は嘘で溢れている。

**包・疱** 旧字の包は常用漢字の包となり、飽和・泡沫細胞・抱負・…等の<sup>つくり</sup>旁に用いられるが、旧字の包は(単純・带状)疱疹・水疱症・天疱瘡・膿疱症・面皰・皰・皰疹・…等の<sup>つくり</sup>旁に残っている。包を包に変更した意図は一体何だったのであろうか。

**爆・曝** 原子爆弾による被害は被爆、放射能に曝される被害は被曝である。曝をつい爆と書いてしまう誤りが多かった。しかし、悲惨な東日本震災による福島第一原発事故によって連日被曝の文字が新聞に踊った結果、曝の文字が脳裏に焼き付き、正しく被曝と記載される様になった。悲しくも皮肉な出来事である。

ところで、衛生学・公衆衛生学の分野で、本来曝露と記載されるべきところ暴露が用いられている事実に気付く、二十年程前に公衆衛生学の教授に最近「曝されるばくろ」と「暴くばくろ」とが混用されているが、構わないかと訊いてみたところ、どちらでも良いとの御返事であった。確かに産業医の研修会等に出席してみると両者が使用されている。曝を暴と書きかえる表記は当用漢字表の制限下で漢字の「書きかえ」が行われた事に淵源を有する。

**囊** 囊は、胆嚢・結膜嚢・涙嚢・ボーマン嚢・精嚢・陰嚢・歯嚢・…等 解剖学用語に使用される他に、嚢胞や寄生虫学で学ぶ嚢子(シスト)・嚢虫にも使用され、使用頻度の高い漢字である。しかし、誤って嚢が用いられる場合が非常に多い。嚢はJIS漢字であり、嚢が正字である。

**剝** 漢字は、国際標準であるISOにおいて規格化されているが、剝と剥とは別の漢字コードで異なる文字として扱われている。剝が常用漢字で、網膜剝離・胎盤剝離・表及剝離・剝脱・剝離子・…等の他、「外科的に剝離する」・剝ぐ・剝がす・…等に使用される。剥はJIS漢字である。剝は平成二十二年に改訂常用漢字になった。

**溢** 脳溢血・溢血斑・溢れる・…等はこの漢字が正字で、溢は俗字である。この俗字は非常に多く用いられている。縊(縊死)の<sup>つくり</sup>旁も溢と同じである。手書き字体では形が崩れるので<sup>つくり</sup>旁を益と書く事が許される(後述)。

**蹲・尊** 蹲踞の蹲と尊の<sup>つくり</sup>旁は尊の旧字体である。

**疇** 鑄造の鑄の<sup>つくり</sup>旁は旧字の壽から寿に変更になっている。しかし、範疇の疇・疾風怒濤の濤・躊躇の躊・黙禱

の禱・…等の旁は壽を用いる。黙禱は黙禱とも記されるが、禱は禱の簡易慣用字体である。

**滲** 滲出・滲出性（中耳炎・網膜剝離）・滲出性紅斑・血が滲む・汗が滲み出る・…等の滲はこの漢字が正字で、滲は俗字である。滲出は当用漢字表の制限下で浸出に書きかえられた為に浸出も今尚用いられている。

**搔** 引っ搔く・搔破・搔爬・隔靴搔痒・…等は搔が正字で、搔は簡易慣用字体ではある。

**癢** 痒みは医学用語では痒痒とも表記される。正字は癢である。因みに、痒痒は広辞苑<sup>3)</sup>には登載されていない。

**嘔** 嘔吐の嘔・嘔気の嘔はこの漢字が正字で、嘔は俗字である。

**軀** 軀幹の軀はこの漢字が正字で、軀は俗字である。尤も軀幹は現在体幹に書きかえられている。

**這・逢・逗・腿** しんによoughには「一点しんによough」の漢字と「二点しんによough」の漢字とがある。使用頻度の高いしんによoughの付く漢字の多くは一点しんによoughになっており、二点しんによoughは旧字になっている。しかし、這う・辿る・逢う・洗う・逗留の逗・遡及の遡・逞しいの逞・逍遙の逍・褪色の褪・大腿の腿・…等は二点しんによoughである。「一点しんによough」の漢字と「二点しんによough」の漢字との二種類がある事は誠に困惑する事態である。何故こんな中途半端な事をしたのであろうか。この困った事態は今後も手付かずのまま続くのであろうか。

**鹼・臉** 石鹼が正しい表記である。鹼は簡易慣用字体ではある。また、臉が正しい漢字であり、臉は俗字である。

**濾** 濾過は濾が正字である。しかし、汙が簡易慣用字体として認められてはいるが、汙過、ましてやろ過では余にも品位に欠ける。

**攪** 攪拌・攪乱が正しい表記である。しかし、攪が簡易慣用字体として認められてはいる。しかし、パソコンを使用している現在、もう二、三回クリックしさえすれば正しい攪が得られるのであれば、敢えて攪拌と清打する必要は全く無いのではないか。

**塡** 写真の真や慎重の慎では真が用いられているが、補塡・充塡・装塡・…等の眞は旧字のままである。顛末書の顛にも眞が用いられる。

**漿** 旧字の將は常用漢字の将に変わっている。漿も漿に変っている（奨学・奨励・…）。しかし、漿は変わっていないので、漿膜・漿液・血漿・…等と表記される。

**溺** 旁は弱でなく、溺は俗字である。溺死・溺愛・…等が正しい表記である。

**膠** 膠質（コロイド）・膠原線維・膠（にかわ）・…等はこの字体が正字である。羽の部分の旧字体のままに据え置かれている。誤謬の謬の旁も同じである。

**鞅** 鞅が印刷標準字体である。漢字源<sup>4)</sup>並びに広辞苑<sup>3)</sup>

は鞅・強鞅を例示している。これが正しいと思われるが、新字源<sup>8)</sup>は鞅は俗字、鞅を俗字・印刷標準字体としながら、鞅を正字として扱い、鞅・強鞅を例示している。

**齲** 部首 齒（歯）部の漢字は、歯と齡以外の漢字は全て歯を含む。従って、齲蝕・齲齒類・齲齲・齲齲・齲・…等が正しい漢字である。齲も印刷標準字体であり、齲は簡易慣用字体である。解剖学用語の歯肉を某歯科大学では伝統的に齲齲と呼んでいる。齲も偏は歯である。

**飢饉** 飢が旧字で飢が常用漢字である。饉が印刷標準字体である。種類の異なった「しょく偏」が並んでいるのを見ると奇妙な感じがする。しかし、飢饉は同一の「しょく偏」である。

**蝕** 腐蝕の蝕の「しょく偏」は饉の「しょく偏」と同一である。前出の齲蝕の蝕もこの文字である。

**餅** 血餅・餅肌・尻餅・…等はこの文字である。

**餌** 食餌・給餌・…等はこの文字である。

「しょく偏」に「食」と「食」との二種類がある。

**撥・潑** 旧字の發から常用漢字の発を作ったが撥や潑の旁は変更されなかった。撥水加工されていない皮革や衣服に撥水性を持たせる為の防水スプレーを吸い込むと呼吸器の障害を起こす。必ず屋外で、且つ風上で使用すべきである。元氣潑潑は、潑が正字で潑は俗字である。  
**瀉** 止瀉薬・吐瀉物・瀉血・…等は瀉が正字である。ところで、現在でも瀉血療法の施行される事があるのだろうか。

**啞** 旧字の亞・惡は常用漢字の亜と惡に変更になっており、亜鉛華軟膏・亜急性・亜流・亜種・…の様に、惡は悪性・増悪・悪寒・悪心・悪阻・悪露・…の様に用いられている。しかし、啞然の啞の旁は亞のままが正字である。尤も啞が簡易慣用字体として認められてはいる。

**壺** 肺結核患者の枕元には痰壺が置かれた時代もあったと聞く。咯血に備えて洗面器も置かれていたかも知れない。不治の病で死亡すれば柩に納められ、次いで骨壺に納められた。壺はこの字体が正字である。

**葛** 葛藤・葛湯・葛根湯・葛飾区・…等はこの字体を用いる。しかし、褐（褐色芽細胞腫・褐色萎縮・褐色色素・…）・渴（口渴）・掲（掲載）・喝（恐喝）・…等の旁とは字体が異なる。偈（偈文）でも同様の字体の旁であるが、宗教的用語なので馴染みは少ない。

**鉤** 旁に勾を用いる鉤の方が引っ掛けるのに相応しい感じがするが、鉤が正字である。解剖学用語 改訂第13版<sup>14)</sup>では体鉤・鉤状突起・椎体鉤・…等と鉤を用いているが、鉤が正字である。有鉤条虫・無鉤攝子・有鉤探子・鉤（クラスプ）・鑄造鉤等は鉤の字が用いられる。医学用語では鉤の字が広く用いられているにも拘わらず、どうして解剖学用語では鉤が用いられたのであろうか。ところで、日産のカルロス・ゴーンが逮捕された。犯罪人が



拘束される場合、狭い小部屋に閉じ込められるので旁には句が誠に相応しい感じがするが、通常は勾留と表記される。しかし、拘置所には句の字が用いられる。何とか連想を働かせて正しい字体を覚えようとするが、中々一筋縄では行かない。

**彎** 解剖学用語 改訂第13版<sup>14)</sup>では弯曲・側弯・前弯・後弯…等と記載されているが、彎が正字である。従って胃の大彎・小彎の様に記載すべきである。尤も弯が簡易慣用字体として使用が許容されてはいる。広辞苑<sup>3)</sup>には、わん-きょく【湾曲・彎曲】と記載され、学術用語集 歯学編<sup>15)</sup>は驚くべき事に湾曲歯根を載せている。

**攣** 痙攣が正式医学用語として用いられた時期もある<sup>13)</sup>が、痙攣が正字である。「引き攣る」と使用される事もある。

**拇** おやゆびを意味する漢字である。従って拇指・拇趾と書いて手の親指・足の親指を意味するが、解剖学用語にこの漢字は用いられない。指に朱を付けて印鑑の代わりに押す「ばいん」は拇印である。

**歩** 進歩の歩の旁は歩ではない。旧字の歩から常用漢字の歩を作ったが、歩の旁を歩に変更しなかった。しかし、渉猟や交渉の渉の旁には歩が使用されている。

**膨張・腫脹** 張と脹とは、現在はこの様に使い分けられている。かつて膨脹が使われていた。ところが、学術用語集 物理学編(昭和二十九年三月発行)で膨張に書きかえられた。時を同じくして国語審議会から報告された「当用漢字補正資料」において、この脹が当用漢字表から削除される候補となった。これ等を受けて、新聞界では、日本新聞協会「新聞用語言いかえ集」(昭和三十年四月発行)から膨張と書く事になり今日に至っている<sup>16)</sup>。広辞苑<sup>3)</sup>では【膨張・膨脹】と両者が記載されている。

脹は何故か度々常用漢字からの除外候補に曝されながらも、命脈を保っていたが平成二十二年の改訂常用漢字表からとうとう除外されてしまった<sup>5)・6)</sup>。しかし、常用漢字から除外されたからと言って「う蝕」や「処方せん」「ほ乳類」..等の様に仮にも「腫ちょう」と「交ぜ書き」にする事は何としても避けたい。常用漢字表の下では、漢字の制限は無く「交ぜ書き」を強制してはいない。我々は「交ぜ書き」の呪縛から解放されるべきである。日本語表記に対する感覚の問題かもしれないが、交ぜ書きは見つともない。それにも拘わらず国立大学の某二歯学部における大学院講座名に「う蝕学」が使われている。

**膻・膺** 広辞苑<sup>3)</sup>には ちつ【膻・膺】 ちつ-えん【膻炎】が立項されている。新聞には膻炎・膺炎の両者が認められる。しかし、膻は膺の俗字である。先に筆者等は、膻は常用漢字と書いてしまった<sup>17)</sup>が、印刷標準字体である。

**附** 横浜市立大学医学部は二つの附属病院を有する。戦前には「附」と「付」とは、漢語では一般に使い分けて

いた。すなわち、「つく・つける」の意を含む語には、例えば、「附属」「附表」の様に「附」を用い、また、「わたす・あたえる・さずける」の意を含む語には、例えば、「交付」「給付」の様に「付」を用いた。戦後の国語施策の実施以降は、漸次「附」と「付」を使い分けず、「附」を用いる場合にも「付」を用いる方向に向かって行った。種々の経緯があって法令および公文での取り扱いとしては、従来の用字法を尊重して「附属・寄附・附則・附帯・附置」については「附」を用い、これ以外のもの原則として「付」を用いる事とした<sup>18)</sup>。ふるさと納税は「寄附」を使っている。しかし、新聞は「寄付」を用いている。全国的に「付属病院」としている大学もあるが、由緒正しいのは「附属」である。新聞関係は「付属」を用いる事に決めたが故に、横浜市立大学医学部附属病院が新聞記事になる際には「付属病院」と記載される。秋篠宮家の長男悠仁はお茶の水女子大学附属中学校に在籍しているが、事件を報ずる新聞は「付属中学校」と記載していた。新聞に書いてあるから「付属病院」「付属中学」が正しいと思ったら大間違いである。新聞の用字・用語は要注意である。

漢字の字体の問題ではないが、言及する機会が無いと思われるので、ここで「～にも拘わらず」と「御」について述べておきたい。

**拘わらず** in spite of を意味する「～にもかかわらず」は拘の漢字を使うものと考えて来た。拘の使用を避けて、仮名で「～にもかかわらず」と表記される場合も多い。ところが、最近「～にも関わらず」の表記を見る機会が多くなった。しかし、「～にも拘らず」が正しい。

**御** 最近、医学論文の謝辞で「ご指導頂きました..」の表記を多く見る。「横浜医学」も例外ではなく、「御指導頂きました..」は殆ど見出せない。

昭和四十年代に筆者藤田は論文に謝辞を書く際には必ず「擲筆するに際し、御指導・御校閲戴きました○○○教授に深く感謝の意を表します」の様に「御」を用いて表記した。心底より感謝と敬意の意を表したかったからである。教えられてこうした訳ではない。ところが、最近「御」の代わりに「ご」が極めて多く使用されている。教授就任の挨拶状・一流製薬会社社長就任の挨拶状・医師会や学会の学術集会案内状や総会会長の挨拶状…等における「ご」の使用は、敬語としては誠に軽く、「御」の代わりに仕方なくただ形式的に添えられている気さえして不快にすら感じられる。

文化庁の資料で「御」と「ご」の使用について調べてみた<sup>19)</sup>。

終戦直後は、公文でも新聞業界でも、「御」が多く用いられていたようである。しかし、昭和二十七年の内閣通知「公文作成の要領」では次の様に指示されていた。

「お」はかなで書くが、「ご」は漢字でもかなでも良い。  
たとえば「お願い」「御調査」「ご調査」

これに対して昭和五十六年の「常用漢字表」の告示に伴い、内閣通知「公用文における漢字使用等について」では、次の様に指示されている。

「次の接頭語は、その接頭語が付く語を漢字で書く場合は、原則として、漢字で書き、その接頭語が付く語を仮名で書く場合は、原則として、仮名で書く、

例 御案内 御調査

ごあいさつ ごべんたつ」

すなわち、挨拶 鞭撻 と漢字を使用するならば、御+挨拶 御+鞭撻 となる。

平成二十二年の「公用文における漢字使用等について」も同様になっている<sup>6)</sup>。

しかし、従来「ご」の扱いは仮名書きでも良いとされていたのでありこの形も引き継がれている。それは、例えば昭和三十五年版の新聞用語集によれば「御」は当用漢字音訓表でも「ご」と読むことは認められているが、固有名詞化されたもの以外はなるべく「ご」と仮名書きするとされている。昭和五十六年の新聞協会の新聞用語懇談会がまとめた「新聞用語集」によれば、接頭語としては「ご」を用いる事とし、その例として、

ごあいさつ ご縁がある ご結婚 ご多分に漏れず  
等が挙げられ、漢字で書く習慣の強いものや、固有名詞的なものに「御」を用いる（御所・御用納め・御用学者…）としているが、積極的に「御」は用いておらず、更に「NHK編新用字用語辞典」（昭和五十六年発行）では「ことばの表記について」の「基本方針」として「ひらがなで書くことば」の一つ「ご<御>」に関し、「御」は原則としてかな書きするが、あとに漢字の語が続くときは漢字で書いてもよいとある。

皇室関係用語の扱い方については、各社の意見統一を行い昭和三十五年版の「新聞用語集」によれば、固有名詞化されたもの以外はなるべく「ご」と仮名書きする。

例 御結婚→ごけっこん 東宮仮御所  
とあり、「ご..」の語例が多数掲げてある。しかし、その根拠は必ずしも明らかでない<sup>19)</sup>。新聞紙上に、天皇陛下ご訪問県・天皇ご一家・皇太子ご夫妻・ご結婚…の様に「ご」が使用されている。皇室関係用語に関しては新聞各社の取り決めに従って「ご」を用いているのであって、我々が「ご」を使用する根拠にはならない。その上「天皇ご一家」「皇太子ご夫妻」の様に漢字の間に平仮名一個が挟まれる記載には違和感を覚えないであろうか。

商業方面でも、新聞・広告についてみると昭和二十九年前後に「御」から「ご」への移り変わりがみられる<sup>19)</sup>。

文化庁は、以上の如く解説しているが、我々一般人が「御」と「ご」とのいずれを用いるべきかを具体的には示していない。しかし、「ご」は新聞・放送ないし商業界が

好んで用いる表記である。

俱進会たより 第162号（平成31年1月30日）の「新年のご挨拶（ママ）」で理事長は「御支援・御協力を賜り..」「御健康を祈念致し..」、学長は「御理解をいただき,..」「変わらぬ御支援・御協力を..」と表記しておられた。さすがである。それに対して他の方々は「天皇がご逝去」「新天皇のご即位」「ご指導ご鞭撻..」等「ご」を用いておられた。一体「御」はどんな時に用いるのであろうか。「御」の存在意義をどう考えておられるのであろうか。

具体的指示・教示が無くとも、敬意を表そうと意図すれば当然「御」を選び取る事になると思うのであるが、これは筆者等の独断と偏見であろうか。

図2は「横浜医学会」から発行された平成二十九年度の教室研究業績集が送付された際の添え状である。全てに「御」が用いられている。発信人 横浜市立大学医学会会長並びに「横浜医学」編集委員長御兩名の丁寧さを感じこそすれ、何の嫌味も過度の堅さも無く、誠に適切な文面と思われる。この様にこそ「御」を使用すべきではないか。

ところで、上述の如く報道界では皇室関係に「ご」を使うが、当の皇室の方々は「御」と「ご」をどう使っているだろうか。令和元年五月二日付の新聞に新天皇陛下の「おことば」が載っているので図2に示す。

御心はさて置いて、「御即位」「御自身」と当然の事ながら「御」を用いている。まさか天皇陛下が新聞の表記を真似て「ご」を使うことは有り得る筈がない。

最終的には、書き手が自分の信念に基づいて表記する事は自由なので、「ご」の使用が間違いとは言えない。自由に「御」と「ご」とのどちらをも使用する事が出来る。しかし、相手が居る事である。受け手が「ご」の使用をどう受け取るかは別の問題である。「ご容赦下さい」では、その誠意を感じ取る事は出来ない。「何卒ご出席下さい」「是非ご参加下さい」「何卒ご指導の程宜しく..」と言われてもその真意に関しては大いなる疑問を抱く。

筆者藤田は、人様に差し上げるお手紙に「御」の代わりに「ご」を用いた事は無い。筆者は徹底して「御」か「ご」かに拘る。<sup>こたわ</sup>「ご招待」なる御招待状には絶対に出席する積りは無い。「是非ご協力を」と言われても御協力はしない。「ご霊前」「ご香典」は受取りを拒否する。

## Ⅳ 考 察

### Ⅰ) 医学用語と「交ぜ書き」「書き換え」並びに「新字体の採用」

法令は「書きかえ」であるが、ここから「書き換え」を用いる。

当用漢字は極力漢字使用を制限する方針で、不足する漢字は仮名書きによる「交ぜ書き」、他の漢字による「書

拝啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます。

日ごろから、横浜市立大学医学部・医学会に多大なる御協力を賜りまして  
厚く御礼申し上げます。

さて、当会では毎年医学部医学科の研究業績を「横浜医学」に掲載いたし  
ております。この度 2017 年の「研究業績集」（「横浜医学」第 69 巻 3 号）を  
刊行いたしましたので、御送付申し上げます。

御多忙中とは存じますが、御高覧の上、今後とも尚一層の御理解御支援を  
賜われれば幸甚に存じます。

末筆ながら、時節柄御自愛の程祈念申し上げます。

敬具

## 天皇陛下のおことば（全文）

日本国憲法及び皇室典範特例法の定めるところにより、  
ここに皇位を継承しました。  
この身に負った重責を思うと肅然たる思いがします。  
顧みれば、上皇陛下には御即位より、三十年以上の長き  
にわたり、世界の平和と国民の幸せを願われ、いかなる時  
も国民と苦楽を共にされながら、その強い御心を御自身  
のお姿でお示しになりつつ、一つ一つのお務めに真摯に取り  
組んでこられました。上皇陛下がお示しになった象徴とし  
てのお姿に心からの敬意と感謝を申し上げます。  
ここに、皇位を継承するに当たり、上皇陛下のこれまで  
の歩みに深く思いを致し、また、歴代の天皇のなさりよう  
を心にどめ、自己の研鑽に励むとともに、常に国民を思  
い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国及び  
日本国民統合の象徴としての責務を果たすことを誓い、国  
民の幸せと国の一層の発展、そして世界の平和を切に希望  
いたします。

図2 「御」の使用例

上 横浜医学会事務局からの「横浜医学」送付の添え状  
右 天皇陛下のおことば 朝日新聞 令和元年五月二日

き換え」が勧められた。この状況の中で正式医学用語にも「交ぜ書き」と「書き換え」「新字体の採用」が導入された。

解剖学用語集 改訂第11版<sup>9)</sup>（昭和四十四年発行）は当用漢字表の制限下で脛・頸・兎・頰・囊・橈・臍・脛・脛・彎・… の様な新字体を採用する事を余儀なくされた。改訂第12版<sup>10)</sup>（昭和六十二年発行）もそれを踏襲して作成された。

医学用語辞典<sup>13)</sup>（昭和五十年第一版発行）まえがきに「日本医学会医学用語委員会編『医学用語辞典』が、ようやく完成をみることになった。膨大な医学用語が、秩序をもたず乱雑に使用されたならば、おおきな混乱を招くことは明らかである。（中略）使用する漢字はなるべくやさしいものを選び、目によらず耳からも誤りなく理解しうる字をとることに気を配ったが、これも日本語そのものの制約があって、必ずしも十分には行われなかった。（後略）」とある。

他人の学術論文を校正しなければならない責任感から昭和六十二年に「医学用語辞典」<sup>13)</sup>を購入したが、掻は（爬）[術]・え（壊）死・えん（嚙）下・のう（囊）胞・そう（瘙）痒・ひょう（療）痘・う（齧）蝕・抑うつ・うつ血・うつ滞・… 等と「交ぜ書き」を容認しており、また、そしゃく（咀嚼）・せき（咳）・… 等と「書き換

え」を容認しており、更に労働・頸・臍帯・兎径・脛骨・眼脛・脛・汨胞・痙攣・滲出・弯曲・[歯牙]萌出・嘔吐・… 等の「新字体による用語」が正式医学用語として、多く認められた。昭和五十六年には既に常用漢字が内閣告示されて漢字の制限はもはや無くなっていた。とても使用に耐える代物ではなく、全く使用する事無く新品同様のまま今日まで本箱の隅に放置していた。今回文献引用することで初めて出番が回って来た。

## Ⅱ) 医学用語と常用漢字

昭和五十六年に常用漢字が発表され当用漢字は廃止された。当用漢字は制限色が非常に強かったのに対し、常用漢字では、この運用に当たっては「科学、技術、芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない」と記された。専門領域には常用漢字表に載っていない漢字でも使用する事が可能になった。

実際には、新字体の漢字使用を余儀なくされていたながら、他方では当用漢字表にも常用漢字表にも載っていない咽・喉・蓋・顎・牙・臼・頰・腎・脊・腺・眉・唾・肘・膝・椎・爪・尻・股・隙・嗅・挫・捻・弄・痕・醒・餌・鬱・剝・潰・瘍・梗・塞・腫・瘍・箋・斑・貼・… 等は医学において日常茶飯に用いられて来た。因みにこれらの漢字が常用漢字に取り入れられたのは平成二十二年の改訂常用漢字表においてであった<sup>5, 6)</sup>。



中川<sup>20)</sup>は、坐・尖・又・這・頸・…等医学に重要な漢字が常用漢字に採用されなかった事を問題提起しているが、もし必要ならば随時使用すれば良いのであって筆者等は大きな問題とは考えていない。この論でもし各学問分野がそれぞれに重要な漢字を常用漢字に採用する事を要求するならば、常用漢字の数は膨大になってしまう。世の中は医学中心で回っている訳ではないので、医学にとって重要な漢字だからと言って常用漢字に採用される事が当然であるとする考え方には賛成できない。

### Ⅲ) 印刷字体と手書き字体との関係

漢字の字体が問題となるのは印刷字体であって、手書き字体は原則的に問題とならない<sup>2・4)</sup>。手書き字体にはかなりの自由度が認められており、印刷文字字体の通りに書くと形の崩れる文字は手書き字体、例えば、溢・隘や噂の傍の部分や尊の字形で書く事は構わない。表外漢字の字体も基本的に同様である。重要な事は印刷字体はパソコンで正しい字体を選ぶ、あるいは校正時に正しい字体に直す事である。漢字には真行草、すなわち、真書(楷書)・行書・草書があり、万葉仮名の草書体である草仮名から平仮名が生まれた。手書き字体は自由奔放である。手書き字体には、略字・俗字も許容される。

本稿執筆中に新元号の「令和」が発表され、新聞にも「令和」に関連する記事が載ったが、その中の一つに「令和」の印刷字体と手書き字体との関係に関する記事が載ったので、ここに紹介しておきたい(図3)。

更に学術論文・学術書・新聞その他で広く明朝体を用いられているが、明朝体にも種類は色々ある。現在、学術論文や学術書・漢和辞典・国語辞典等は標準的な明朝体を用いて作成されている。従って、我々も標準的な明朝体を用いるのが適切と思われる。勿論明朝体以外の字体も間違いでないし、同じ明朝体でも細かなデザインの差は問題とされないが、ある文章を書いていてこの漢字はこの明朝体、あの漢字はあの明朝体と同一文章中に混ざって用いられる事は通常有り得ない。統一すべきである。

### Ⅳ) 常用漢字の字体と印刷標準字体におけるデザイン差

常用漢字表の「前書き」に「字体についての解説」が付され、同じく表外漢字表には「表外漢字だけに適用されるデザイン差」が付されている。両表は、個々の漢字の字体を明朝体活字の中のある一種を例に用いて示している。現在一般に使用されている各種の明朝体活字には同じ字でありながら微細なところで形の相違の見られる物があるが、これらの相違は活字設計上の差、すなわちデザインの差であって字体の差異ではないとされている。

偏と旁<sup>へん づかり</sup>に関しては、大小・高低、離れているか、接触しているか、点画の性質については、点か棒(画)か、はねるかとめるか、…等が解説され、デザイン差が例示されている。その中に「筆押さえ」の有無に関する例が挙げられている。すなわち、芝と芝や更と更、廻と廻、

#### 指針で示された字形の例 文化審議会国語分科会の指針から

常用 手書き文字の字形の例  
漢字表 (いずれも正しい)

令 令 令 令  
など

#### 「マ」でもOK

新元号の令和。「令」という文字の下部分を、カタカナの「マ」のように書く場合もあるが、国語辞典編纂者の飯間浩明さんによれば、これも正解。常用漢字表の解説では、字体や字形の細かな違いを許容しており、文化審議会国語分科会は2016年に指針をまとめている。「令」についても、下の部分が「マ」になっている手書き例も示した。「字の細部に違いがあっても、その漢字の骨組みが同じであれば、誤っているとはみなされない」としている。飯間さんは、「菅官房長官が掲げた毛筆体の文字でも、『令』の最後の字画が、左側に少しはねている。でも、いいんです」と話す。(丸山ひかり)

図3 印刷字体と手書き字体との関係  
朝日新聞 平成三十一年四月三日

咬と咬、…等がデザイン差であって同じ文字であると考えられている。しかし、「筆押さえ」の有る字体は古い漢和辞典には載っているが、最近の新しい漢和辞典には載っておらず、しかも経済産業省は梗・杖・又・咬・鞭・甦・臆・靱・…等を梗・杖・又・咬・鞭・甦・臆・靱・…等にJIS字形を変更している<sup>7)</sup>(図1)。今や、辞典からもパソコンからも消えてしまっている字形を我々が使用する必要も機会も無くなっているであろう。更に「表外漢字字体表だけに適用されるデザイン差」において、漢字使用の実態への配慮から字体の差と考へなくてもよい例の一つに篇と篇が挙げられている。しかし、漢和辞典<sup>4・8)</sup>では篇が人名漢字、篇は俗字と記載されている。それにも拘わらず字体の差と考へなくともよいと解説されたのではデザイン差をどう理解してよいかわからなくなる。装飾性を重んじて使用される事も有り得るかもしれないが、我々が医学論文・医学書を執筆する際には然したる根拠なしに「筆押さえの有る字体」を使う事は避けるべきではないかと考える。すなわち、内閣告示された常用漢字表並びに表外漢字字体表に示され、代表的漢和辞典並びに国語辞典で用いられている標準的な明朝体による漢字を正字として用いるのが無難で、我々が敢えてデザイン差を深く追及する必要はないと思われる。

### V) 簡易慣用字体 二十二字

パソコンの普及によって、今や漢字は書く時代から打つ時代に移行している。二、三回キーを打ち直せば正字が得られる今日、簡易慣用字体の二十二字は如何なる意

義を有しているであろうか。手書き字体ならいざ知らず、敢えて簡易慣用字体を印刷字体に選択する必要性は無いと思われる。

## VI) 正しい字体

正しい字体の漢字、すなわち正字と言っても、文部省（文部科学省）が定めた常用漢字（二一三六字）と印刷標準字体（一〇二二字）、それに法務省が定めた人名用漢字である。それ以外は通産省（経済産業省）が定めたJIS漢字である。JIS漢字は伝統的「康熙字典体」を採用していない。印刷標準字体が国語審議会から答申されたのを受け平成十六年に経済産業省がJISコード表改正（一六八字の例示字形の変更）を行っているが、印刷標準字体（字形）とJIS漢字字体（字形）との間に相当の差異のある事が知られる（図1）。我々は正字としては常用漢字と印刷標準字体並びに人名漢字を使用する他は使用する漢字の多くをJIS漢字に依存している。

先に筆者等は、恐らく余程の暇人か物好きか、あるいは、いわゆる「漢字で飯を食っている者」でなければこのような漢字の微細な差異に精通する事は不可能ではないかと述べた事がある<sup>17)</sup>。しかし、原理・原則のないままに漢字の字体が決められた為に、余程の暇人でも余程の物好きでも微細な漢字の差異に精通する事は殆ど不可能ではないか。更に「漢字で飯を食っている者」にさえ不可能らしく、新聞にも書籍にも時々俗字の認められる事がある。中途半端な国語施策のもたらした結果であるが、国にはこの状態を打破・改善しようとする動きは見受けられない。恐らく今更手の付けようが無いのではないか。従って、今後も我々は現状の漢字環境で生きていくことを余儀なくされ続けるのであろう。

## V 結 語

医学の学術論文や学術書の執筆を通して我々は日本語による出版文化の一翼を担っている。そこで、医学に係る代表的漢字の正しい字体を検討した。

戦後日本の漢字施策では確たる原理原則に基づいて漢字の字体が決められたのではなく誠に中途半端であり、漢字の正しい字体に精通する事は殆ど不可能である。

正字は常用漢字表並びに表外漢字字体表で示され代表的な漢和辞典や国語辞典で使用されている標準的明朝体を用いるのが適切と思われる。

## 文 献

- 1) 倉島長正 著：国語100年—20世紀、日本語はどのような道を歩んできたか。小学館、2002年5月。
- 2) 国語研究会 監修：[第6次改訂] 現行の国語表記の基準。ぎょうせい、平13年10月。

- 3) 新村 出 編：広辞苑、第七版 並びに付録、一刷。岩波書店、二〇一八年一月。
- 4) 藤堂明保、松本 昭、武田 晃、加納喜光 編：漢字源 改訂第四版。学習研究社、2007年1月。
- 5) ウィキペディア：ウィキペディア 常用漢字（2019年1月18日 閲覧）
- 6) 文化庁：文化庁ホームページ 常用漢字表（平成二十二年内閣告示第二号）、公用文における漢字使用等について（平成二十二年内閣訓令第一号）平成二十二年十一月三十日。
- 7) 経済産業省：経済産業省ホームページ JIS漢字コード表の改正について—168字の例示字形を変更—平成16年2月20日。
- 8) 小川環樹・西田太一郎・赤塚 忠・阿辻哲次・釜屋 武士・木津祐子 編：新字源、改訂新版 初版。角川書店、2017年10月。
- 9) 日本解剖学会 編：解剖学用語 付組織学用語 発生学用語 改訂11版 NOMINA ANATOMICA JAPONICA。丸善株式会社、昭和44年7月。
- 10) 日本解剖学会 編：解剖学用語 改訂12版 NOMINA ANATOMICA JAPONICA。丸善株式会社、昭和62年9月。
- 11) 森 於菟、平澤 興、小川鼎三、森 優 著：解剖学 第1巻 改訂第7版。金原出版株式会社、昭和33年3月。
- 12) 藤田恒太郎 著：人体解剖学、第18版。南江堂、昭和46年5月。
- 13) 日本医学会 医学用語委員会 編：医学用語辞典、第9刷。南山堂、1986年7月。
- 14) 日本解剖学会 監修：解剖学用語 改訂13版 TERMINOLOGIA ANATOMICA JAPONICA。医学書院、2007年3年。
- 15) 文部省 日本歯科医学会 編：学術用語集 歯学編（増訂版）。口腔保健協会、平成4月11月。
- 16) 文化庁 編集：[問20]「膨脹」か「膨張」か。「ことば」シリーズ21 言葉に関する問題集10、34-35頁。大蔵省印刷局、昭和59年3月。
- 17) 藤田浄秀、座間正和：解剖学用語 改訂第13版に対する私見。横浜医学、69：597-606、2018。
- 18) 文化庁 編集：[問3]「附属」か「付属」か。「ことば」シリーズ3 言葉に関する問答集1、七刷、2-3頁。大蔵省印刷局、昭和56年5月。
- 19) 文化庁 編集：[問24]「ご・・・」か「御・・・」か。「ことば」シリーズ25 言葉に関する問答集12、43-46頁。大蔵省印刷局、昭和61年3月。
- 20) 中川喬市：常用漢字表への追加文字に関する私見 — 現代国語における正書法の在り方を求めて — 日本医事新報、No.4443（2009.6.20）、98-101。